

# 統語的要素を入力に含む派生に見る 語彙的緊密性 (lexical integrity) の問題 \*

江畑 冬生

ebata@human.niigata-u.ac.jp

キーワード： 形態論 サハ語 トゥバ語 統語的派生 語彙的緊密性

## 要旨

形態法の理論的研究においては、語彙的緊密性 (lexical integrity) と呼ばれる仮説が提唱されている。この仮説は、「語の内部には統語的要素が介入しない」という通言語的な制約を主張するものである。チュルク諸語に属するサハ語およびトゥバ語では、筆者が「統語的派生」と呼ぶ現象がみられる。統語的派生では、修飾や支配あるいは疑問詞疑問や全部否定のような統語的關係を含む派生が可能である。つまり統語的派生は、明らかに語彙的緊密性に反する現象であり通言語的な特異性を持っている。本論文では、語彙的緊密性は決して言語普遍的な制約とは言えないことを示し、語彙的緊密性が適用される範囲は言語ごとに異なっているのだと主張する。

## 1. はじめに

語彙的緊密性 (lexical integrity) と呼ばれる通言語的な仮説がある。この仮説は、「語の内部には統語的要素が介入しない」ことを主張するものである。このような考え方は、言語において形態法と統語法とがそれぞれ独自の体系・原理を持つという見方でもあり、伝統文法にも生成文法などの理論的研究の考え方にも合致するものである<sup>1</sup>。

本論文では、英語・日本語・サハ語・トゥバ語の派生を取り上げる。これらの言語では、句を入力とする派生がある程度まで可能である。これらのうちサハ語およびトゥバ語（いずれもチュルク諸語に属する）においては、筆者が「統語的派生」と呼ぶ現象が観察される。統語的派生の最大の特徴は、様々なタイプの統語的要素を入力に含むダイナミックな派生が可能な点である。

本論文ではサハ語およびトゥバ語の統語的派生の分析を通じて、語彙的緊密性が決して言語普遍的な制約とは言えないことを示す。さらに語彙的緊密性が該当する範囲もまた、言語ごと

\* 本研究は科研費（課題番号 17H04773）による成果の一部である。本論文中のサハ語・トゥバ語のデータは、特に断りの無い限り、筆者によるフィールドワークまたは筆者の作成したコーパスデータからのものである。本論文は、第 72 回新潟大学言語研究会（2017 年 7 月 24 日）における口頭発表の内容に加筆したものである。秋孝道、石野好一、武久智一、三井正孝の各氏から頂いた重要なお指摘に深く感謝する。

<sup>1</sup> ただし生成文法理論においては、形態法と統語法のインターフェースをより柔軟に捉える考え方として分散形態論 (distributed morphology) がある。

に異なっていると主張する。

## 2. 背景：照応の島から語彙的緊密性へ

一般言語学的に、新たな語幹を形成するプロセスのうち主なものとして複合と派生がある。これらの形態的プロセスは、伝統的な記述文法においても生成文法などの理論的研究においても、形態法の中で処理されると考えられてきた。換言すれば、統語的な規則の適用が起こるのは、形態的プロセスが完了した後であると見なされる。

このような考え方を背景とした言語理論のうち初期のものとして知られているのは、Postal (1969) の「照応の島」の概念である。Postal (1969) は、「語の一部だけが照応に参加することはできない」ことを主張した。Postal (1969) はこの制約を (1) のような *inbound anaphora* の場合と (2b) のような *outbound anaphora* の場合とに分けて示している。

- (1) \*oneless, \*suchly, \*do soists, \*themsupporters [Postal (1969: 218)]  
 (2) a. my mother<sub>i</sub>'s sister<sub>j</sub>; wanted her<sub>j</sub>; to live here [Postal (1969: 206)]  
 b. \*my moternal<sub>i</sub> sister<sub>j</sub>; wanted her<sub>j</sub>; to live here

「照応の島」の考えは後に、Lapointe (1980) による語彙的緊密性 (*lexical integrity*) へと発展した<sup>2</sup>。Anderson (1992: 84) によれば、語彙的緊密性が働くことにより「統語法が語の内部構造を操作したり参照したりすることはない」(Principle of Lexical Integrity: “The syntax neither manipulates nor has access to the internal structure of words”)。このような考え方は、Spencer (1991: 42), Lieber (2010: 184), Haspelmath and Sims (2010: 203) 等でも基本的には認められている。しかしながら次節でも検討するように、Corbett (1987) による上ソルブ語の例や Harris (2006) によるグルジア語の例など、語彙的緊密性に対する反例も提出されている<sup>3</sup>。

Booij (2009) は、語彙的緊密性は2つの側面、すなわち不可分性 (*non-interruptability*) と接近不可能性 (*non-accessibility*) から成るという議論を行った。その上で Booij (2009) は、不可分性は語彙的緊密性の定義的特性であり侵されることはまずないのに対し、接近不可能性は必ずしも排除されるものではないと主張した。

影山 (1993) でも、語彙的緊密性を4つの特性(形態的な不可分性、統語的要素の排除、外部からの修飾の禁止、語彙照応の制約)に分けている。影山 (1993) もやはり、不可分性を除く3つは絶対的な制約ではなく例外が見られるのだとする。

このように「語の内部には統語規則が適用されない」という考えは広く受け入れられており、かつそれには一定の反例があることも知られている。しかしながら、反例のタイプに関しては詳しい考察がなされているとは言えない。次節では、英語および日本語における語彙的緊密性

<sup>2</sup> *lexical integrity* には「形態的緊密性」の訳が与えられることもある。同様の概念は *atomicity of words* または *lexicalist hypothesis* とも呼ばれる。詳しくは Di Sciullo and Williams (1987: 49) などを参照されたい。

<sup>3</sup> Scalise and Guevara (2005 :170) によれば、語彙的緊密性にも強い仮説と弱い仮説がある。

の例外が特定のタイプに限られていることを示す。

### 3. 語彙的緊密性に対する例外

前節でも触れたように、語彙的緊密性は決して絶対的な制約とは言えず反例も存在することが知られている。語彙的緊密性に対する有名な反例は、*bracketing paradox* として知られる<sup>4</sup>。Spencer (1988) は Williams (1981) からの例として (3) を挙げ、Belk (2013) は Cinque (2010) からの例として (4) を挙げている。いずれの例でも問題となるのは、意味的には前部要素が後部要素の語幹のみを修飾するにも関わらず、形態的には派生接辞があくまで後部要素に付加している点である。

(3) *transformational grammar-ian*  
*atomic scient-ist*

(4) *hard work-er*  
*heavy drink-er*

英語では (5) のようなタイプの形容詞派生も生産的である。ここで注意したいのはカッコ内に示したような単純語は存在しないことである。さらにこのような派生の結果としては形容詞を生むケースに限定されており、例えば \**She blue-eyes*. のような動詞を派生することは不可能である。これに関連して、Spencer (1988: 671) においても (6) のような動詞派生が不可能であることが指摘されている。

(5) *blue-eyed* (\**eyed*)  
*open-minded* (\**minded*)

(6) \**symphony orchestrate*  
\**outboard motorize*

影山 (1993: 326-331) では、語彙的緊密性に対する日本語の反例が挙げられている。影山 (1993) はこの現象を「句の包摂」と呼び、以下の 3 タイプに分類している。[1] 元来は形態素ないし語を対象とする語彙的な接辞要素が句にまで拡張する場合 (7), [2] もともと句ないし節を対象とする句接辞。影山 (1993: 329) はさらに、後者を (8) のような「接続詞的なもの」と (9) のような「名詞的なもの」に分けている。

<sup>4</sup> Spencer (1988) が取り上げた *bracketing paradox* には 2 つのタイプがある。1 つは *un-easi-er* や *un-happi-er* のように、3 音節語に比較級の接辞 *-er* が付加しているように見えるタイプであり、もう 1 つは (3) のように複合名詞に派生接辞が付加しているように見えるタイプである。本論文では後者のタイプのみを取り上げる。

- (7) 不精な中年男性-用  
大企業の社長-級
- (8) アルバイトをし-ながら  
友人を訪ね-がてら  
羽田を離陸-後
- (9) 欄をし-たて  
授業を休み-がち  
ビールを飲み-放題

本節では語彙的緊密性に対する英語および日本語の反例を見てきた。本論文では、「前部要素と後部要素の間の統語的關係」と「派生語の品詞」の2つに注目したい。その結果、両言語における反例のタイプは以下のように一般化できる。

- (10) 語彙的緊密性に対する英語の反例のタイプ：前部要素と後部要素の間の関係は**修飾**に限られ、派生語は**名詞または形容詞**に限られる
- (11) 語彙的緊密性に対する日本語の反例のタイプ：前部要素と後部要素の間の関係は**修飾または支配**に限られ、派生語は**広義の体言**に限られる<sup>5</sup>

このように日英語には語彙的緊密性に対する反例が存在するとは言っても、特定のタイプに限られている。Corbett (1987) による上ソルブ語の例では、*mojeho*「私の」と *bratr*「兄」の間に性・数の一致が見られるものの、形容詞 *bratrowe*「兄の」を派生する点では英語の反例と大きく異なるとは言えない。

- (12) *mojeho*            *bratrowe*            *džěci*  
my (GEN.SG.M)    brother's (NOM.PL)    children  
'my brother's children'

しかしながら次節で見るように、サハ語・トゥバ語の統語的派生では、前部要素と後部要素の間の関係においても派生語の品詞においても、英語・日本語に比べその範囲が広いことが分かる。

<sup>5</sup> 影山 (1993) では「夏目漱石と正岡子規-展」のような並列関係の例も挙げられているが、このようなタイプの例外は他とは性質が異なると判断したため本論文では考察対象外とした。(8) や (9) における派生語には副詞や形容動詞と見なせるものを含んでいる。本論文では加藤 (2008) の考え (すなわち従来の名詞・形容動詞・副詞・連体詞を廃して「体詞」としてまとめる。統辞形態要素を語の外部に持ちうる形式を「体詞」と呼ぶ) に倣い、これらを広義の体言として扱う。

#### 4. サハ語・トゥバ語の統語的派生

Ebata (2011) や江畑 (2014b) では、通言語的な特異性を有する派生を統語的派生と呼んでいる。統語的派生の最大の特徴は、派生の語基の有する文法範疇を部分的に保持する点にある。サハ語・トゥバ語の一部の派生接辞には、統語的派生の機能がある。

筆者の観察によれば、サハ語・トゥバ語の統語的派生の通言語的な特異性は以下の (A) や (B) の場合に顕著である。これらの派生が生産的に起こることは、語彙的緊密性への強い反例となる。さらに本論文では語彙的緊密性が関連する現象として (C) も取り上げる。

- (A) 屈折接辞を内包する派生
- (B) 統語関係を保持する派生
- (C) 代名詞・疑問詞を語基とする派生

##### 4.1 サハ語の統語的派生

サハ語の派生接辞のうち一部のものは統語的派生を行う (表1に示す)。これらの接辞はすべて拘束形態素であり、派生語は母音調和やアクセントなどを根拠に1語と見なせる<sup>6</sup>。

[表 1] サハ語の統語的派生接辞

| 派生接辞                         | 派生語                                      | 元の語                         |
|------------------------------|--|-----------------------------|
| -leex 「～を持った」<br>(PROP)      | tuus-taax 「塩味の」<br>xarčĭ-laax 「金持ち (の)」  | tuus 「塩」<br>xarčĭ 「金」       |
| -teeki 「～での」<br>(LOCREL)     | küöl-leevi 「湖での」<br>kün-neeſi 「日々の」      | küöl 「湖」<br>kün 「日」         |
| -lii 「～のよう (な/に)」<br>(SIM)   | eder-dii 「若者のような」<br>kihi-lii 「人間らしく」    | eder 「若い (人)」<br>kihi 「人」   |
| -ii (名詞派生)<br>(NMLZ)         | araxs-ii 「別れ」<br>eb-ii 「追加」              | araxs 「別れる」<br>ep 「加える」     |
| -(ee)hin (名詞派生)<br>(NMLZ)    | xamsaa-hin 「動き」<br>teŋnee-hin 「比較」       | xamsaa 「動く」<br>teŋnee 「比べる」 |
| -(ee)čĭ (行為者名詞派生)<br>(ACTOR) | üören-eečĭ 「学生」<br>salay-aáčĭ 「指導者」      | üören 「学ぶ」<br>salay 「指示する」  |
| -imtie (可能名詞派生)<br>(POT)     | tuhuy-umtuo 「耐久性のある」<br>tost-umtuo 「もろい」 | tuhuy 「耐える」<br>tohum 「折れる」  |
| -lee (動詞派生)<br>(VBLZ)        | üle-lee 「働く」<br>kuorat-taa 「町に行く」        | üle 「仕事」<br>kuorat 「町」      |

<sup>6</sup> サハ語の語性 (wordhood) の問題に関して詳しくはEbata (2013) を参照されたい。サハ語では名詞と形容詞の区別は、少なくとも形態レベルでは不明瞭であるため、本論文では単に「名詞」と呼ぶ。

表1に示した派生接辞は、一見したところでは単なる派生を行うように見える。しかしながらこれらの派生接辞は、統語的派生の機能を持っている。以下ではまず、屈折接辞（複数接辞・所有接辞・過去接辞）を内包する派生の例を示す。

- (13) *arü-lar-daax küöl*  
 島-PL-PROP 湖  
 「島々を持つ湖」
- (14) *otutus sül-lar-daaxi tutuu*  
 30番目の 年-PL-LOCREL 建物  
 「1930年代の建物」
- (15) *moskuba att-ï-naaxi kuorat*  
 モスクワ そば-POSS.3SG-REL 都市  
 「モスクワ近郊の町」
- (16) *kühür-büt-tüi sanjar-ar*  
 立腹する-PST-SIM 話す-PRS:3SG  
 「彼(女)は怒ったように話す」

次に、統語的關係を保持する派生の例を示す。(17) と (18) は、動詞の項構造支配を保持する派生の例である（ここでは対格名詞句を保持するもののみを示すが、別の格でも同様に可能である）。(19) と (20) は、修飾關係を保持する派生の例である。

- (17) *as kultuura-ti-n üöret-ii*  
 食べ物 文化-POSS.3SG-ACC 学ぶ-NMLZ  
 「食文化の研究」
- (18) *kinige-ni aax-aačči*  
 本-ACC 読む-ACTOR  
 「本を読む人」
- (19) *sabis= sanja sukuna istaan-na-m-müt* [Ubrjatova (1972: 575)]  
 RDP= 新しい ラシャ ズボン-VBLZ-REFL-VN.PST  
 「真新しいラシャ地のズボンを穿いた」

- (20) *aka ovo-lor-u uhun kimñü-lar-daa-ta* [Vinokurova (2005: 382)]  
 父 子-PL-ACC 長い 鞭-PL-VBLZ-PST:3SG  
 「父親は子供たちに長い鞭を与えた」

例えば (18) を字義どおりに訳せば「本を読者」である。このように動詞の支配関係を保持したまま名詞が派生されることは、日英語では許されない。(17) や (18) のような支配関係を内包する派生が可能である点に、サハ語の統語的派生の特異性が顕著である。

第3節で見たように日英語においても修飾関係を内包した派生が可能だが、その結果として動詞が派生されることは無い。しかしながらサハ語では、句を入力とした動詞の派生が可能である。(19) や (20) の他にも、*kilgas üye* 「短い一生」から *kilgas üye-le-n* 「短い一生を生きる」を派生することや、*elbex xarçï* 「多くの金」から *elbex xarçï-la-n* 「多くの金を得る」を派生することが可能である (いずれの例でも動詞派生接辞の後には再帰接辞が付加されている)。

さらにサハ語では、疑問詞疑問や全部否定を表す句を派生の入力とすることが可能である。しかもその際には、これらの統語的特性を失わずに動詞を派生することができる。

- (21) *anigi ial xas ovo-lo-n-ol-loro sōb-üy*  
 現代の 家族 いくつ 子-VBLZ-REFL-VN.PRS-3PL 良い-WHQ  
 「現代の家族は、何人の子供を持つのが良いのか？」

- (22) *bihata kim-i=da xanna=da kuottar-bat-tuuu*  
 どうやら 誰-ACC=CLT どこ=CLT 逃がず-NEG:VN.PRS-SIM  
*teriner žahanar kuul-lar=ebit*  
 用意される 獣-PL=EVID  
 「[それらは] どうやら誰もどこにも逃さないよう用意されている獣たちなのだった」

(21) において疑問詞を含む句からの派生 *xas ovo-lo-n* 「何人の子供を持つ」は、依然として疑問詞疑問文を形成する統語的能力を有している。(22) では、全部否定 (疑問代名詞と否定接辞による) を含む句が依然として全部否定を表している。

以上より、語彙的緊密性に対するサハ語の反例のタイプは (23) のようにまとめられる。

- (23) 語彙的緊密性に対するサハ語の反例のタイプ：前部要素と後部要素の間の関係は修飾・支配に加え疑問詞疑問や全部否定があり、派生語には名詞も動詞もある

#### 4.2 トゥバ語の代名詞・疑問詞からの派生

サハ語と同じくチュルク諸語に属するトゥバ語でも、(24) のように屈折接辞を含んだ統語的

派生が可能であり、(25) や (26) のように修飾関係を内包した動詞の派生も可能である。

- (24) *xöy*            ***urug-lar-lig***            *īye*  
 沢山の            子-PL-PROP            母  
 「沢山の子を持つ母親」

- (25) ***süt-tiig***            ***šay-la***  
 乳-PROP            茶-VBLZ  
 「ミルク入りの茶を飲む」

- (26) *ačā-m*            ***aldan***            ***xar-la-an***  
 父-POSS.1SG    60            年-VBLZ-PST  
 「父は60歳になった」

ただしサハ語の場合とは異なり、修飾以外の統語的關係を含む派生は今のところ見つからない<sup>7</sup>。従って語彙的緊密性に対するトゥバ語の反例のタイプは (27) のようにまとめられる。

- (27) 語彙的緊密性に対するトゥバ語の反例のタイプ： 前部要素と後部要素の間の関係は  
**修飾に限られ、派生語には名詞も動詞もある**

#### 4.3 トゥバ語における代名詞・疑問詞を含む派生

本節では、トゥバ語における代名詞・疑問詞からの派生に注目する。トゥバ語では代名詞・疑問詞に派生接辞が付加した結果が、依然として指示機能・照応機能を有することがある：*bo-la* 「この道で行く」、*döo-le* 「あの道で行く」、*min-ča* 「このようにする」、*minčaar-dagi* 「この時の」、*inčaar-dagi* 「その時の」、*kayī-la* 「どの道で行く」、*men-gileštir* 「私のように」<sup>8</sup>。

- (28) *čan-ar-da*            *baza*            ***bo-la-ar =bis***  
 帰る-AOR-LOC    も            近称-VBLZ-AOR=1PL  
 「私たちは帰る時にもこの道で行く」

<sup>7</sup> 江畑 (2015) でも指摘したように、トゥバ語においても否定接辞を含む派生自体は可能であるが、その際にはもはや全部否定を形成することはできない。

<sup>8</sup> サハ語にも同様の例として、*xanna-laa* 「どこへ行く」、*kim-neex* 「誰たち(誰-PROP)」が存在する。なお野島 (2011) では、ブヌン語でも人称代名詞語根から動詞が派生されることを指摘している。野島 (2011) と同じく本論文でも、ロシア語の *тыкать* 「『君』と呼ぶ」やドイツ語の *duzen* 「『君』と呼ぶ」は人称代名詞のメタ的意味を表すため類例には該当しないと考える。



- (29) *stadion-ga*            *kayī-la-p*            *čed-er-il*  
 スタジアム-DAT      どの-VBLZ-CVB      達する-AOR-WHQ

「スタジアムにはどの道を行けば着きますか？」

代名詞や疑問詞は、閉じた語類であるとされる (Crystal 2008: 391) . Harris (2006) によれば, Lieber (1992: 123) は照応の島の制約のうち *inbound anaphora* が不可能であることを代名詞が閉じたクラスを形成することに帰している. しかしながらトゥバ語では代名詞・疑問詞からの派生が可能であり, かつ派生語は依然として指示機能・照応機能を保持する. この事実も, 語彙的緊密性に対する反例の1種であると見なせる.

実は日本語では, 疑問詞を含む派生語がかなり生産的である ((30) には筆者の内省による例の一部を示す) <sup>9</sup>. つまり代名詞・疑問詞からの派生は一律に不可能なのではなく, それを許すか否か, およびその生産性に関しても, 言語ごとに異なっている.

- (30) どちら様; 何人 (なにじん), 何座, 何部; 何月, 何時, 何分, 何秒, 何度, 何個, 何枚, 何冊, 何台, 何通, 何件, 何軒, 何発, 何人 (なんにん), 何名, 何頭, 何番, 何号

## 5. まとめ

本論文ではまず, 統語的要素が語の内部に介入しないという考えとして照応の島および語彙的緊密性を紹介した. その上で, 日英語に見られる語彙的緊密性に対する反例のタイプを示した. 語彙的緊密性に対する日英語の反例は, 特定のタイプに限られている.

チュルク諸語に属するサハ語・トゥバ語では, 一部の派生接辞が統語的派生を行う. 両言語の派生においては, 語彙的緊密性に対する反例として日英語には見られないタイプも存在する. 英語・日本語・サハ語・トゥバ語それぞれの派生における語彙的緊密性に対する反例のタイプにおける前部要素と後部要素の関係および派生語の品詞は表 2 のようにまとめられる.

[表 2] 語彙的緊密性に対する反例となる派生のタイプ

|      | 前部要素と後部要素の関係        | 派生語の品詞  |
|------|---------------------|---------|
| 英語   | 修飾                  | 名詞, 形容詞 |
| 日本語  | 修飾, 支配              | 広義の体言   |
| サハ語  | 修飾, 支配, 疑問詞疑問, 全部否定 | 名詞, 動詞  |
| トゥバ語 | 修飾                  | 名詞, 動詞  |

表 2 から明らかなように, 語彙的緊密性に反する派生は, 決して例外的とは言えない. 特に

<sup>9</sup> 関連して影山 (1993: 336) や浅尾 (2015) では, 疑問詞を含む複合語の例を挙げている. 疑問詞を含む複合語の存在も, 日本語の疑問詞が閉じた類ではないことを示唆すると言える. なお塚本 (1993) によれば, 日本語の場合とは異なり韓国語では格支配する動詞を含む派生や代名詞を含む複合はできない.

修飾関係を内包する名詞の派生に関してはむしろ、本論文で取り上げた4つの言語すべてにおいて可能である。従って語彙的緊密性は、決して言語普遍的な制約と言えるものではない。派生プロセスは、ある一定の統語的關係を内包することが可能である。内包しうる統語的關係の種類および派生語の品詞については、可能な範囲が言語ごとに決まっている。

トゥバ語では代名詞や疑問詞からの派生が可能であり、かつ派生語は依然として指示機能・照応機能を保持する。換言すれば、指示機能や照応機能を保持した派生が可能だということである。この事実もやはり、語彙的緊密性への反例となる。

一般言語学における、派生プロセスの伝統的な捉え方は、「単に新たな語彙項目を生む」というものである（例えば Aikhenvald (2007: 35) による “Derivational morphology results in the creation of a new word with a new meaning” のような記述が典型である）。しかしながらサハ語・トゥバ語の統語的派生に見るように、言語によっては様々な統語的要素を入力としたダイナミックな派生プロセスが可能である。

なお日本語では、「財布を盗まれた」「冷静さを失いやすい」「仕事を休みがちだ」のような用言から用言の派生において、元の動詞語幹の支配關係が保持されうる<sup>10</sup>。日本語におけるこのようなケースの解釈および位置づけに関しては今後の課題としたい<sup>11</sup>。

## 略号

ACC: 対格, ACTOR: 行為者派生, AOR: アオリスト, CLT: 接語, CVB: 副動詞, DAT: 与格, GEN: 属格, LOC: 処格, LOCREL: locative-relational, M: 男性, MIR: 気づき, NMLZ: 名詞派生, NOM: 主格, NEG: 否定, PL: 複数, POSS: 所有, POT: 可能名詞, PROP: proprietive, PRS: 現在, PST: 過去, RDP: 重複部, REFL: 再帰, REL: relational, SG: 単数, SIM: similitive, VBLZ: 動詞派生, VN: 形動詞, WHQ: 疑問詞疑問

## 参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Yurievna. (2007) *Typological dimensions in word formation*. Timothy Shopen. (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, volume 3*. 1-65. Cambridge: Cambridge University Press.
- Anderson, Stephen R. (1992) *A-morphous morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Belk, Zoë. (2013) The paradox of the heavy drinker. *UCL Working Papers in Linguistics*. 25, 102-111.
- Booij, Geert. (2009) Lexical integrity as a formal universal: A constructionist view. Sergio Scalise et al.

<sup>10</sup> 関連して由本 (2005) では、日本語の「難しい論文を読みすぎて」が「論文が難しすぎ」の解釈を受けうることを指摘している。この事実も、日本語における用言から用言への派生が単に新たな語彙項目を生むものではないことを示唆している。

<sup>11</sup> 管見の限りにおいては、日本語の動詞に付加する個々の接辞が屈折接辞であるのか派生接辞であるのか十分な議論が尽くされたとは言えない。筆者の私見に関しては江畑 (2014a) に示した通りである。

- (eds.) *Universals of language today*. 83-100. Dordrecht: Springer.
- Cinque, Guglielmo. (2010). *The syntax of adjectives: A comparative study*. Cambridge: MIT Press.
- Corbett, Greville G. (1987) The morphology/syntax interface: Evidence from possessive adjectives in Slavonic. *Language*. 63, 299-345.
- Crystal, David. (2008) *An encyclopedic dictionary of language and languages*. Oxford: Blackwell.
- Ebata, Fuyuki. (2011) Syntactic derivation and nominalization/verbalization in Sakha (Yakut). Tokusu Kurebito. (ed.) *Linguistic Typology of the North*. 2, 67-85.
- Ebata, Fuyuki. (2013) Valency retention in Sakha derivational nominalization. 『アジア・アフリカの言語と言語学』 7号, 53-66.
- Harris, Alice. C. (2006) Revisiting anaphoric islands. *Language*. 82, 114-130.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims. 2010. *Understanding morphology [2nd ed.]*. London: Hodder Education.
- Lapointe, Steven. (1980) *The theory of grammatical agreement*. PhD. Thesis, University of Massachusetts.
- Lieber, Rochelle. (1992) *Deconstructing morphology*. Chicago: Chicago University Press.
- Lieber, Rochelle. (2010) *Introducing morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Postal, P. (1969) Anaphoric islands. *CLS* 5, 205-239.
- Scalise, Sergio and Emiliano Guevara. (2005) The lexicalist approach to word-formation and the notion of the lexicon. Pavol Štekauer and Rochelle Lieber (eds.) *Handbook of word-formation*. Dordrecht: Springer.
- Di Sciullo, Anna-Maria and Edwin Williams. (1987) *On the definition of word*. Cambridge/London: MIT Press.
- Spencer, Andrew. (1988) Bracketing paradoxes and the English lexicon. *Language*. 64, 663-682.
- Spencer, Andrew. (1991) *Morphological theory. An introduction to word structure in generative grammar*. Oxford: Blackwell.
- Ubrjatova, E.I. (1972) Kratkij grammatičeskij očerok jakutskogo jazyka. P.A. Sleptsov. *Jakutsko-russkij slovar'*. Moskva: Izdatel'stvo sovetskaja entsiklopedija. 569-605.
- Vinokurova, Nadezhda. (2005) *Lexical categories and argument structure. A study with reference to Sakha*. Utrecht: LOT.
- Williams, Edwin. (1981) On the notions "lexically related" and "head of a word". *Linguistic inquiry*. 12, 245-274.
- 浅尾 仁彦 (2015) 「代名詞・疑問詞を含む複合語の調査」 『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 89-94.
- 江畑 冬生 (2014a) 「形態素タイプの認定 —日本語動詞における屈折を例に—」 『日本エドワード・サピア協会 研究年報』 28号, 29-39.
- 江畑 冬生 (2014b) 「統語的派生再論」 『人文科学研究』 135輯, 1-20.

- 江畑 冬生 (2015) 「サハ語における肯否の対称性と否定を含む派生」 『北方言語研究』 第5号, 5-13.
- 影山 太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 加藤 重広 (2008) 「日本語の品詞体系の通言語的課題」 『アジア・アフリカの言語と言語学』 3号, 5-28.
- 塚本 秀樹 (1993) 「語彙的な語形成と統語的な語形成 —日本語と朝鮮語の対照研究—」 国立国語研究所 (編) 『日本語と外国語の対照研究IV 日本語と朝鮮語 下巻』 191-212. くろしお出版.
- 野島 本泰 (2011) 「ブヌン語における代名詞語根からの動詞派生」 大西 正幸・稲垣 和也 (編) 『地球研言語記述論集』 3号, 85-95.
- 由本 陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房.

# The Problem of Lexical Integrity Hypothesis in the Syntactic Derivation of Sakha and Tyvan

Fuyuki EBATA

ebata@human.niigata-u.ac.jp

**Keywords:** morphology, Sakha, Tyvan, syntactic derivation, lexical integrity

## Abstract

Modern morphological theories propose the Lexical Integrity Hypothesis, which posits a cross-linguistically applicable constraint that is formulated as “the syntax neither manipulates nor has access to the internal structure of words.” Turkic languages Sakha and Tyvan have a distinctive derivational process, that the author calls “syntactic derivation.” In the syntactic derivation of these languages, the derivational processes can contain syntactic relations such as modification, government, wh-question, or total negation. Essentially, syntactic derivation may be considered cross-linguistically unique in that it clearly deviates from the Lexical Integrity Hypothesis. This paper claims that the Lexical Integrity Hypothesis is not a cross-linguistic principle and that its applicable range is language-specific.

(えばた・ふゆき 新潟大学)